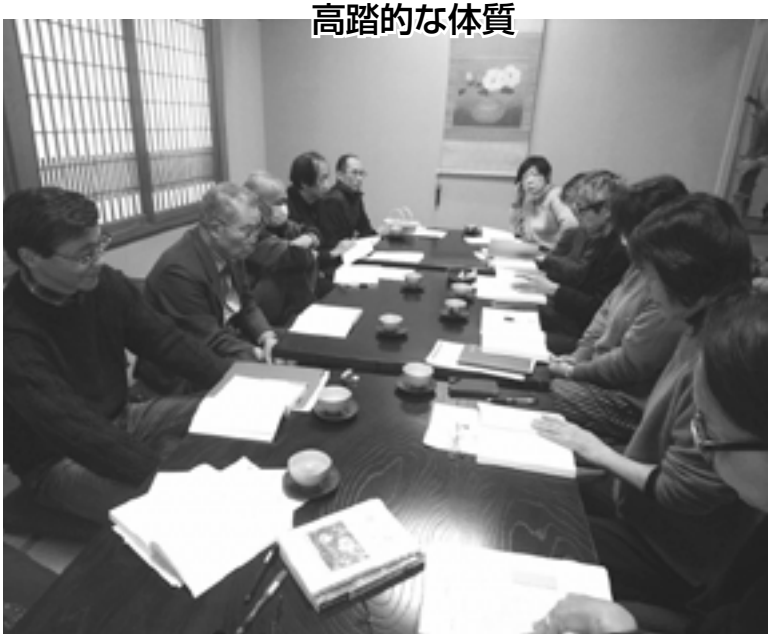
詩的でクリティカルな文学精神

高踏的な体質

北方文学

新潟県

六十年続く総合文芸誌



「北方文学」80号の合評会風景

「北方文学」は一九六一年に新潟県長岡市を中心に創刊された。中心的役割を果たしたのは國學院大學文学部を卒業して帰郷し、高校教師となったばかりの吉岡又司だった。創刊号巻頭に載る吉岡の「密室のあなたに」という小説論は、「北方文学」創刊同人たちの文学に対する姿勢をよく代弁している。「密室のあなたに」は、当時デビューして間もない大江健三郎と石原慎太郎の「大衆の平均的趣味の方向への逃走」を批判し、ダダやシュルレアリスムの精神を担った「詩における無償の実験」を、小説へと導入していくことを宣言している。

「密室のあなた」とは、閉塞的な状況を生きる文学の主体そのものを意味していて、それは「北方文学」のいわば高踏的な体質を予感させるものであった。そして、そのような吉岡の詩的で、クリティカルな文学精神が「北方文学」を主導していくのである。創刊同人の一人は後に、「その頃の『北方文学』の同人は依怙地なところがあり、文学グループ付きあいを軽蔑し、狭い世界にとじこもって誇りだけ高かった」と回想しているが、そうした傾向はひょっとしたら、半世紀後の現在も持続しているかも知れない。

創刊時の方向性を、孤高の精神と文学的ポピュリズムへの抵抗と位置づけるならば、それは当然維持すべきものであって、六十年後の今日までそれは連綿と継承されてきたのだと誇りを持って言い得るだろう。後継同人の誰もが文学的矜持の姿勢と、文芸ジャーナリズムへの批判的精神を確固として持ち続けてきたからである。

しかし、「北方文学」が文学賞というものとまったく無縁であったわけではない。第四号に掲載された、創刊同人の一人・木原象夫（きさお）の「雪のした」は、一九六三年の第五十回芥川賞候補作となった。また翌年第五十二回の芥川賞候補となった高橋実を同人として迎えてもいる。さらに文学界新人賞受賞者が二人同人として在籍していたこともある。

同人が受賞した賞として特筆すべきは、大井邦雄が二〇一四年に受賞した、日本翻訳文化賞特別賞であろう。大井は早稲田大学名誉教授となって長岡市に帰郷して以来、ハーリー・グランヴィル＝バーカーのシェイクスピア論訳述に、ライフワークとして取り組んできた。その功績が賞を主宰する日本翻訳家協会に認められたのだった。大井も創刊同人の一人であり、「北方文学」のアカデミックな側面を代表していたが、今年一月に亡くなってしまった。

創刊同人が次々と消えていく中で、雑誌の中核を担っていったのは、いわゆる団塊の世代であった。彼らは同時に全共闘世代でもあったわけで、創刊同人達が六〇年安保闘争の世代であったことを考え合わせると、「北方文学」の世代論的位置づけを理解してもらえるだろう。ちなみに私は二〇〇二年から編集発行人を務めていて、世代的には団塊の世代のやや後ろに属している。

「北方文学」の特徴を一言で言えば、あらゆるジャンルをカバーする〝総合文芸同人誌〟ということになるだろう。詩と小説はもちろん、俳句も短歌もある。評論の守備範囲も広くて、日本の古典から近現代文学、外国文学もカバーし、さらには音楽論や美術論もある。宗教論もあれば、言語論や哲学的論考も排除しない。また外国文学の翻訳を得意とする同人もいて、現代中国の小説が誌面を賑わせることもある。そうした傾向も創刊時の特色を引き継いでいる部分である。

結局は評論主体の同人誌だと言うことができる。全国に同人誌はたくさんあるが、詩誌を除くと小説主体の同人誌が圧倒的に多いだろう。評論主体の同人誌はおそらく数えるほどしかないと思う。そんな特徴を持った雑誌であり、評論の担い手の興味は多方面を向いているというわけだ。裏を返せば同人の志向するところが、てんでバラバラだということになるが、そうではなくむしろ、個々の同人がそれぞれ自分の領野を独自に切り拓いているということにしておこう。

しかもそのような開放的な多様性が、「北方文学」を長続きさせている要因のひとつであると思われる。それは教条的な単色性への陥落から雑誌を救っているし、他の同人に対する寛容の精神をもたらしていると思う。またそれは受容可能な領域の大きさを示していて、それがより多様な人材を同人として受け入れることのできる素地ともなっている。純粋培養されたものよりもハイブリッドの方が強靭なのである。

高齢化の波は避けがたいものがあるが、現在六十代半ばから七十代半ばまでの同人を中核に、五十代が一人、四十

第 81 号の合評会風景

北方文学会　〒 945-0076 新潟県柏崎市小倉町 13・14　玄文社内
ＴＥＬ 0257-21-9261

代が二人いる。同人の創作意欲は極めて旺盛である。「北方文学」は創刊から六十号までは、一年に一号から一年半に一号のペースで不定期に発行されてきたが、それ以降は六月と十二月の定期で、年に二号という着実なペースで発行を続けている。創刊五十号記念号は商業文芸誌なみの四百二十頁という恐るべきページ数を達成したが、昨年十二月の八十号記念号はそれに次ぐ三百四十五頁を記録した。もとより厚ければよいというものではないが、それほど同人数が多くもないのにページ数が増えてしまうのは、雑誌がまだ活力を失っていない証拠ではあるだろう。

発行のたびに、二回の編集会議と合評会の計三回集まりを持つことにしている。一回目の編集会議でお互いの作品を読みあって、問題点を指摘しあい、原稿の段階で一旦書き手に戻す。これは事実誤認や誤植をなくするためばかりではなく、それぞれの作品の完成度を上げるために欠かせない工程だと思っている。場合によってはボツということもその編集会議で決定している。二回目の編集会議は雑誌の形に組んだ状態での最終チェックのために開いている。合評会がなんといっても一番重要な集まりである。そこでお互いの作品を批評の場にさらすことになるからである。結構厳しく批評しあう。それがなければそれぞれが先に進めないというのが、同人間の共通認識となっている。

（「北方文学」編集発行人／柴野毅実）